

とくに天理教校第二専修科をめぐる

安井幹夫

1 天理教教師への道

天理教における、次代の信仰の担い手（道の後継者）育成は、広くいえば、それぞれの教会において、ということになります。それだけに、教会の所在する場所、その規模、さらに信仰を指導する会長、といったさまざまなことがらが、その育成にあたっての要因となりますので、その教化力は個々の教会においてかなりのばらつきが認められます。

教団レベルでは、それをより効果的にサポートするうえで、年齢別にシステム化した組織があります。例えば少年会（誕生～中学生）、学生会（高校生～専門学校生、大学生）、青年会（17歳～40歳）、婦人会（高校生～、そのうち16歳～25歳までは女子青年部）が、それぞれの活動を推進しています。それは教区、支部、さらにそれぞれの教会にも結成されています。こうした会活動を通して次代の信仰の担い手が育っていくことになります。

一方、それとは別に、中核的な指導者層の育成を担うものに、私が関わっている天理教校があります。天理教校は天理教の教師養成のために、明治33（1900）年4月開校されました。天理教が当時の神道本局から別派独立するために、内務省に伺ったところ、「学校もないのに独立できるか」と指弾され、当局の指導もあり、4年制の学校として設立されたわけであり、天理教校は、天理教教学機関の源流であり、後に天理中学校（旧制）誕生の母胎ともなっています。また天理幼稚園から天理大学までの学校法人天理大学系列の学校、それと天理教校学園系列の天理教校付属高等学校、天理教校親里高等学校、さらに天理教語学院、天理看護学院、天理医学技術学校があります。

また、教会長をはじめとする天理教教人（教師）養成のための本流ともい

うべきシステムは、歴史的な変遷が幾多みられますが、現在においては、別席といまして9回にわたって神様の話を聞き、心に治めて「おさづけの理」を拝戴する。これが基礎となりまして、3カ月の修養科、信仰の深化を目指す講習会（前期・後期）、教会長任命講習会というように順序を経て、信仰的なレベルの深さと高度さが養われることになります。それは信仰の資格修得と結びついており、ほかの教学機関があっても、最終的にはこのシステムに収斂されます。たとえば、天理高校の卒業生は、修養科修了という資格が与えられ、そのまま前期講習会を受講することができる、というようにです。

このシステムでは、修養科が3カ月、前・後期講習がそれぞれ3週間の期間を要します。別席の期間については地域的な特例（たとえば海外からの帰参者が認められていますが、基本的に毎月1回、計9回の話を聞いて、願い出により、おさづけの理を拝戴することができます。その間9カ月かかるわけですが、こうしたことから、社会で働いている人にとって、別席を受け、おさづけの理を拝戴することは、比較的可能ではありますが、3カ月間の修養科ということになると、自営業でないかぎり、ほぼ職を失うことを意味します。したがって、とくに30歳から60歳までの人たちには、ハードルはきわめて高いといえましょう。

そこで、3日講習会が本年（2004年）4月に立ち上げられたわけでございます。これは30～60歳までの「よふばく」（別席を受けて、おさづけの理を拝戴した者）で、なおかつ教会長の推薦によって受講できるようになっています。1年に1回、3年で3回の受講修了をもって、修養科修了と同等の資格が与えられることになります。

2 教師数の推移

表IV-1は、昭和11（1936）年、昭和21（1946）年、昭和31（1956）年の年別よふばく数です。表IV-2は、その後の昭和35（1960）年からの年別（よふばく）（教人）数の推移を示しています。表IV-1と2から明らかなように、よふばく数は昭和21年からほぼ右肩上がりが増加していますが、平成6（1994）年の1,089,907人をピークとして次第に減少し、昨平成15（2003）年では、100万人を下回り、ピーク時よりも約15万人減となっております。

表IV-1 年別教人及びよふばく数

年度	教 人			おさづけの理拝戴者		
	計	男	女	計	男	女
1936	82,620	47,245	35,375	288,204	—	—
1946	81,153	42,359	38,794	135,704	53,796	81,908
1956	96,261	45,396	50,865	422,454	155,690	266,764

減少傾向を示しはじめた平成7（1995）年に、オウム真理教事件が起こっています。この事件がもたらした、社会の宗教への冷ややかな眼差しと拒否反応は、教勢の減退に無縁ではなかったとみることができます。また山田昌弘氏が『パラサイト社会のゆくえ』（筑摩書房、2004年）の中で、「一九九八年問題」として提起していますが、たしかに日本の社会に地殻変動が起こり、社会意識が変化してきている状況がございます。その状況に否応なしに巻き込まれ、ひいては、とくに家族のあり方の変化が信仰の継承に影響を与え、教勢の減退を招いているように思われます。

また表にはしておりませんが、おさづけの理拝戴者数を単年度の推移で見ますと、昭和50年、51年をピークに多少デコボコしますが、減少傾向にあります。つまり、昭和51（1976）年で3万7,8千の（よふばく）の誕生があります。平成14（2002）年では1万人を切っているわけでありまして、いずれにしても、個別には教勢を伸ばしている教会もあるので、全部が全部というわけではありませんが、教会（教会長）のもつ教化力、布教力が、こうした状況に対応しきれていない、手に余っていることを指摘できるかもしれません。

3 天理教校（本科・専修科・付属高等学校と第二専修科）

昭和49（1974）年4月、学校法人天理大学の系列校とは別に、天理教の教学機関の源流となった天理教校の精神をより徹底すべく、天理教校付属高等学校（全寮制）が開校されました。この高校の卒業生は、卒業後、全員が天理教校第二専修科に進学し、5カ年の修業年限を履修します。すなわち高校3カ年を含めて、計8カ年の一貫教育が構想されたのです。

それまで、天理教校には、大学卒業で教人の資格を有したものを対象とする天理教学の実質的な大学院（2～4カ年）である本科と、高校卒業生を対象とした専修科（2カ年、男女共学、信者詰所から通学）が設けられていましたが、